このままでいいのか日本
これからの日本のとるべき道は

２０２６年が明け、２１世紀も４分の１が過ぎました。

昨年は奇しくも昭和１００年、戦後８０年にあたりました

しかしロシアによるウクライナ侵攻やイスラエルによるガザへの攻撃など、世界各所で戦禍は続いています。

新年早々には南米ベネズエラにも新たな火の手があがりました。

また、温室効果ガスに起因するとされる気候変動による異常気象や都市近郊への熊の出没など、私たちを取り巻く環境は大きく変化しているように思えます。

絶え間なく繰り返される戦争の火種、なかなか解決の糸口も見えない環境問題、世界経済の中における日本の進むべき道も混沌を極めています。

こうした状況の中で、日本は、アジアは、そして世界はどのように未来と取り組んでいくべきなのでしょうか。

目まぐるしく変化を続ける世界にあって、日本はこれまで培ってきた開発力、技術力、生産力といったアドバンテージをどうやって維持していけるのか。また世界平和という大きな課題にどのような貢献をしていくのか。今こそ、その行く末を長い目で見た積極的かつ建設的な日本の取るべき道が求められているのではないでしょうか。

こうした状況の中で、まもなく本誌は創刊６０年を迎えます。

これまで、日本のそして世界の政財界を見つめ続けてきた『月刊公論』は、創刊６０周年を迎えるにあたり、今こそ未来に向かう日本のあるべき姿を問う「このままでいいのか日本。これからの日本のとるべき道」というスローガンを掲げ、更なる進化を進めていく所存です。

世界における日本という国の立脚点を明確にし、混沌を極める世界情勢の中にあっても揺るぎない方向性とポリシーを堅持し、『月刊公論』らしい視点からの発信を続けていきたいと決意を新たにしております。

これからも、読者の皆さんからのご意見に耳を傾け、更に建設的な指標を提示すべく精進を続けていく所存です。

諸兄諸姉からのご指導ご鞭撻を今後ともお願い申し上げます。

本誌主幹 大中吉一